魔法少女リリカルなのはA's～悪ヲ滅シ罪ヲ刈リ取ル者～

白き修羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＡ' ｓ～悪ヲ滅シ罪ヲ刈リ取ル者～

【Ｎコード】
Ｎ９０２６Ｕ

【作者名】
白き修羅

【あらすじ】
六英雄の一人ハクメン。統制機構カグツチ屋上にて彼はユウキ＝テルミとの戦いで瀕死の傷を負った・・・。そして彼は平行世界に飛ばされ、彼は一人の少女と出会う。彼はその少女との出会いで少しずつ変わっていく。「魔法少女リリカルなのは～悪ヲ滅シ罪ヲ刈リ取ル者～」始まります。

プロローグ（前書き）

この小説は、ブレイブルーＣＳのハクメンストーリーのバットエンドを迎えたところから始まります。駄文等ございますが見てくださったらとても嬉しいです。

プロローグ

プロローグ

統制機構カグツチ屋上・釜

ズバァ！！

「ぬうぅ！！」

「ヒャッハーーー！！どうしたハクメンちゃんよぉ！」

碧のオーラを纏った、逆立った緑の髪の男。ユウキ＝テルミが目の前に膝を着いている白い鎧に身を包んだ男、ハクメンを見下ろしている。

「一人で乗り込んできたところまではいいんだけどよぉ・・・」

テルミは右手にナイフを構え。

「やられちゃあダメだろうがよぉ！」

ザグ！！

「ぬぉぉ！！」

テルミの投げたナイフが、ハクメンの左胸に突き刺さる。

「ヒッヒヒヒ！いいねぇ、いい悲痛の声だ！おら！もっと鳴いてみせやがれ！」

再びナイフを投げるテルミ。

グザッ！

「がぁぁぁ！！」

右足、左肩にナイフが突き刺さり、悲痛の叫びを上げるハクメン。

「ギャーハハハハ！！・・・さてぇ・・・そろそろ飽きてきたから・・・殺すわ」

テルミは碧色の三匹の蛟を形成する。

「おいハクメンちゃんよぉ、言い残すことあるかぁ？俺は優しいからなぁ、それだけは言わせてやるわ、ヒッヒッヒ！」

口元がニヤリと歪み、下卑た笑いをするテルミ。そしてハクメンは・・・

「下らぬ・・・殺すなら早く殺せ外道が・・・」

そう言うハクメン。その言葉は正に覚悟の言葉だった。

「ヒヒヒ・・・じゃあ・・・死ねや」

蛟がハクメンに迫る。

「これも・・・運命か・・・」

そう呟くハクメン、蛟が当たる瞬間。薔薇の花弁を乗せた風が蛟を跳ね飛ばす。そしてハクメンの前に美しい金髪の少女。レイチェル＝アルカードが居た。

「てめぇ！クソ吸血鬼が！！」

「道化・・・」

「英雄さん此処は引くわよ」

レイチェルがそう言うと、ハクメンの背後にゲートが発生する。

「邪魔すんじゃねぇよ！！」

テルミ再び三匹の蛟を形成し、レイチェルに向かって攻撃する。

「っ！？」

二匹の蛟がレイチェルに激突し、少し揺らいだ表情をする。そしてもう一匹がハクメンに直撃し吹き飛ばされる。

「グゥ！！」

「なっ！？」

吹き飛ばされたハクメンはゲートの中に入り、その瞬間ゲートが閉じた。

「ちっ！ハクメンを逃がしちまったか・・・クソ吸血鬼！！毎回毎回俺の邪魔をしやがって、うぜぇんだよ！！」

レイチェルはテルミを発言を無視し再びゲートを作る。

「逃げんじゃねぇよ！！クソが！！」

「さよなら・・・次会うときはもっと丁寧な言葉を使いなさい」

そう言いレイチェルはゲートをくぐる。

レイチェルがゲートで来た場所はハクメンが先程ゲートで転移したはずの場所のはずだが・・・

「いない・・・」

周りを見渡してもハクメンの姿は何処にも見えない。あれほどの傷を受けたのだから動けないはず。レイチェルはそう思い、滅多に見せない困惑した表情を見せる。レイチェル知らなかった。先程ゲートをくぐったハクメンは、レイチェルが予想だにしない場所に転移されたとは・・・。

プロローグ（後書き）

どうでしょうか？「ハクメン弱すぎだろw」とか思ってはいけません。少し駄文っぽかったですが・・・。基本この小説はハクメンメインで書いていきますので他のキャラが出ない・・・かもしれません。あと更新が遅いかもしれませんが。暖かい眼で見守ってやってください。

第一話（前書き）

先にこちらを更新しました。では第一話どうぞ。

第一話

第一話

八神家自宅

「はぁ・・・」

深いため息を吐く一人の車椅子の少女。彼女の名は、八神はやて。彼女は足に原因不明の障害があり歩くことができない、そのため車椅子で生活をしている。今日は彼女が8歳になる誕生日だ。本来なら誕生日なら喜ぶはず・・・だが彼女は違った。何故なら

「なんで私には家族おらへんのやろ・・・」

そう彼女には両親がいない。彼女は幼い頃に両親を亡くし、「父の友人」を名乗る人物の庇護を受けながらずっと暮らしてきた。自分を祝ってくれる家族が居ない。彼女は誕生日が来るたびにそう思う。

「あかんなネガティブなこと考えるのやめよ・・・」

彼女はベランダに向かうために車椅子の車輪を動かす。

「けどやっぱ一人は寂しいな・・・」

そう呟く、そしてその時彼女の目の前の空間が歪みだした。

「な、なんや！？」

歪んだ空間が徐々に収まりだすとそこには雪のような真っ白い髪の男が倒れていた。はやては恐る恐るその男に近づく。

「・・・！？この人怪我しとる！！」

その男は所々にまるでナイフで刺され、切り裂かれたような傷がついていた。彼女は慌てふためき、電話に向かう。

「石田先生！人が！人が倒れとる！！私の家です！早く来たって！」

彼女は必死にそう言う。電話が終わると彼女はすぐさま男に近づく。そして彼女は男の手を握る。

「大丈夫ですか！？今お医者さん呼んだから！」

彼女はそう言い握る手を強くする。

それから数分後

「はやてちゃん！」

海鳴大学病院の女医、石田幸恵。彼女ははやての主治医であり、彼女が信頼する数少ない人間である。

「石田先生！この人や！」

「酷い傷！はやてちゃん！この人を病院に連れて行くわよ！」

「お願いします！」

幸恵はすぐに男を病院に搬送する準備をする。

「もう少しや！もう少しで助かるからな！」

彼女はそう呼びかけるが、男はその呼びかけに応じることはない。搬送する準備が終わり、幸恵達は病院に向かった。

「む・・ぅ・・・・」

彼はふと眼が覚める。見知らぬ天井、此処は何処かの部屋だというのは判る。棚に薬品が並び、ベットの周りに白いカーテンがある。何処かの病室だろう。だが彼はそんな事を考えてるのではない。先程までテルミとの戦い、そしてレイチェルの介入により、テルミの攻撃を受け、レイチェルの用意したゲートに飛ばされた・・・。そこまでは覚えている。彼は体を起こし、周りを見渡す。だが普通ならいるはずのレイチェルが居ない。彼は困惑する。そして窓を見る

「ここは・・・カグツチではないな・・・」

窓に広がる風景は彼が知っている風景とは違った。家々が立ち並び、美しい空が広がっている。まずカグツチでは見られない風景だ。それに彼は気づいた。

「魔素が・・・感じられない・・・」

魔素とは第一次魔道大戦において黒き獣が放出した物質で、生態系の変化させたり寿命を縮めたりしてしまう物質だ。だがそれが感じられない。そんなことは有得ない。だが彼は一つの結論にたどり着くことで理解した。

「別の・・・平行世界というものか・・・」

彼はそう呟く。レイチェルの用意したゲートが何かしらの障害が生じ、別の世界とつながり、転移した。そう結論した。そして彼は自分の体を見る。

「!?こ、これは・・・!?」

彼は驚愕する。身体の傷が手当されている。だが彼が驚愕しているのはそんなことでは無い。それは彼の体が何時も身に纏っている鎧の姿ではなかったからだ。

「これは・・・どういうことだ・・・」

するとガチャリと扉が開く。そこには車椅子の少女が居た。

「あ!ようやく眼覚ましたんやな!」

車椅子の少女が彼に近づいてくる。

「心配したんよ、何回も呼びかけても起きんし」

少女は笑みを浮かべてそう言う。

「少女よ、身を映すものはないか？」

「身を映す？・・・ああ鏡のことやね？ちょっと待ってな・・・はいどうぞ」

はやては一瞬困惑した表情をしたが、直ぐに鏡を用意した。そして鏡を手に取り、顔を映す彼は再び驚愕した。そこに映っていたのは髪と目の色は違えど彼がまだ人間であった時の姿。ジン＝キサラギの顔だった。

「え～と大丈夫？」

少女が彼の顔を覗き込んでそう言う。

「・・・問題ない」

「そっかならええんや、あ、私八神はやてっていいますよろしゅうな」

ニコッと笑いながらそう言うはやて。

「名乗られたからには名乗り返さなければな・・・私の名は・・・」

「あ、起きたのね！」

白衣を着た女性が扉の所に立っていた。そして彼に歩み寄る。

「手当てをしたのはお前か？」

「そうよ、どう？身体の具合は？」

「問題ない」

「そ、ならいいんだけどね。私は石田幸恵。この子の主治医よ。しかし驚いたわ、はやてちゃんの家にあなたが倒れているって連絡受けたときは」

「・・・・・・」

彼は黙り込む。

「あ～それなんやけどな先生、チンピラに絡まれてた私をこの人が助けてくれてな、その後家まで送ってくれたんけど怪我しててて倒れて・・・」

はやてはそう言い彼の方を向き「話を合わせて」とアイコンタクトをする。

「そうだったの？」

幸恵は彼の方を向く。

「・・・ああ」

「そう・・・ありがとう、はやてちゃんを助けてくれて・・・・」

「いや・・・気にすることはない・・・・」

彼はゆっくりとベットから降りる。

「動いて大丈夫なの！？」

「問題はない・・・手当てをしてもらってすまなかったな」

彼はそう言い、部屋を出ようとする。

「ちょっ！？どこに行くの！？」

「此処から出るのだが？」

「あなた家は？」

「家・・・私にはそのような所などはない」

「えっ」

彼のその言葉で言葉を詰まらせる幸恵。そして続けて

「じゃあ・・・家族は？」

「・・・昔家族と呼べる者はいたが・・・今は居ない」

部屋が静まりかえる。

「じゃあ家にこうへんか？」

「？」

はやてのその一言に彼は振り向く。

「助けてもらった御礼もしたいし・・・ダメ・・・？」

「・・・・・・」

彼は黙り込んでしまう。そして数秒後

「いいだろう」

彼はそう言った。どうせ行くところも、帰る所もない。ならばこの少女の提案も受け入れるのもいいだろう・・・。彼はそう心の中で言った。はやてはとても喜んだ表情をし

「決まりやな！ほな行こう！」

はやては車椅子をの車輪を回し部屋を出た。

「・・・・・・」

「クスッ」

「何を笑っている？」

彼がそう問いかけると幸恵は

「あの子があんなはしゃぐ姿初めてだから」

「そう・・・なのか？」

「ええ」

「何しとるの～！はよ行こう！」

部屋の外からはやての声が聞こえる。彼は「フッ」と言い部屋を出た。部屋に残ったのは幸恵だけだった。

「不思議な人だったわね・・・あ、名前聞くの忘れた・・・」

幸恵は今更気づいた。

はやてと彼は八神家自宅に着き、居間にいる。

「・・・何故あのような嘘をついた？」

彼ははやてにそう問いかける。

「だって、ベランダに居たら突然出てきました、なんて言えないやん」

「・・・・・・」

確かにそうか・・・。と彼は思う。

「そういえばお兄さんの名前きいてなかったなぁ」

はやては思い出したようにそう言う。

「私の名は・・・ハクメン」

「はく、めん？」

頭に？を浮かばせるはやて。

「なんや変わった名前やなぁ」

「・・・はやてよ、第一次魔道大戦、黒き獣、第十三階層都市カグツチ、ラグナ＝ザ＝ブラッドエッジ、この単語に聞き覚えはあるか？」

「う～んなんかのゲームの単語かな？ごめん知らんわ」

はやてのその言葉でハクメンのここは別世界という結論が当たった。

「はやて、率直に言うが・・・私はこの世界の人間ではない」

「えっ？それ本当？」

「ああ・・・」

そしてハクメンははやてに自分の居た世界の事を話した。はやてはそれをキラキラとした表情で聞いていた。

「すごいな～ハクメンさんのいたとこってまるでゲームの世界のようやな～それでそれで！もっと聞かせて～な」

「良いだろう」

再びハクメンの話が始まる。彼は次に第一次魔道大戦の事を話した。それをだまって聞いているはやて。

「ほえ～ハクメンさんって英雄さんなんや～」

「そう呼ばれていた・・・」

そして彼は次にこの世界に来る経緯を話した。はやては先程より暗い表情になった。

「これが私がこの世界に来た経緯だ・・・」

「ハクメンさんにそんなことがあったんなんて・・・」

はやては静かにそう呟く。

「ハクメンさんは元の世界に帰りたいん？」

はやてがそう問いかけてきたがハクメンは

「いや・・・今の私があちらに戻ったとしても何もできないだろう・・・」

ハクメンは自分の手を見てそう言った。今の身体は人間そのもの。

こんな身体で戻っても瞬殺されてしまうだろう。

「そっか・・・ハクメンさんは家族おらへんやったな、私もそうなんや、小さい時に死んでもうて・・・」

「そうなのか・・・」

はやては暫し言葉を止め

「あのハクメンさん・・・こんなこと言うのはなんやと思うけど・・・私の家族になってくれへんか？」

はやてはそう言うと直ぐにハッとなり

「やっぱ何でもない・・・わすｒ「いいぞ」えっ！」

「いいぞと言っている」

「ほんまか！？ほんとにほんとにほんまか！？」

「くどい、いいと言っている」

今のハクメンをレイチェル達が見たらなんと言うか・・・容易に想像できる。なぜハクメンがはやての申し出を受けたかというと、放っておけなかったからだ。はやては笑顔を見せるが時々とても悲しそうな表情をする。まだ幼い彼女がそんな表情になるのは、恐らくはやてには家族が居ないからだろう。ハクメンは第一次魔道大戦で両親を亡くした子供を多く見た。だが彼女はその子供達よりも悲しい表情をしている。ハクメンはそんな彼女を放っておけなかったのだ。

「〜〜〜！！」

はやては眼に涙を溜めている。

「どうしたはやて？」

「嬉しいんや・・・家族ができたって思うとつい涙が・・・」

「・・・・・・」

ハクメンは静かにはやての頭を撫でる。

「あっ」

「辛かったのだな・・・」

「う、うう・・・うわぁぁぁん！！」

はやては大きな声を上げて泣いた。ハクメンは黙って泣きじゃくるはやての頭を撫でていた。

そして数分後

「落ち着いたか？」

「うん、ハクメンさんがずっと撫でててくれたおかげで大分よくなったわ」

「・・・そうか・・・はやて」

「なんや？」

「私に名前を付けてはくれないか？」

「えっ？なんでや？」

「此処に居る私はハクメンという男だった、だが今の私はその名を使う資格はない。だからはやて、私に新しい名を付けてくれ」

彼のその言葉に頭を悩ませるはやて。

「う～ん名かぁ～・・・ハクト、うんハクトや」

「ハクト・・・どういう意味だ？」

「白い人やからハクトや」

「フッ・・・随分と安直な名だが・・・気に入った、今日から私は八神ハクトと名乗ることにしよう」

「えっ！？八神って・・・」

「私ははやての家族なのだろう？なら性も同じでなければ可笑しいだろう？」

「それもそうやね・・・じゃ今日からよろしゅうなハク兄」

「ハク兄？」

彼は不思議そうな表情をする。

「せや、ハク兄は今日から私のお兄さんってことやからハク兄や」

はやてが満面の笑みでそう言う。

新しき人生を迎えるハクメン改め、八神ハクト。彼はこの先どのような人生を送っていくのか・・・。それはマスターユニット「アマテラス」でさえ知らないことだった。

第一話（後書き）

どうでしたか？まさかのハクメン名前変更。今のハクメン見た目は、白い髪で、赤い眼のジンって所です。第一話にしてはやや強引と思いましたが。ですが案外頑張りました。今のハクメンの力などの設定は次の話で欠きます。感想等待っています。

第二話（前書き）

どうも白き修羅です。最近更新が不定期です、何とかして直したいです。では第二話どうぞ。

第二話

第二話

ハクトがこの世界に転移した日の夜。

「～♪～♪」

鼻歌を歌いながらキッチンで料理を作っているはやて。

「・・・・・・」

料理が出来上がるのを静かに待っているハクト。そして料理ができたらしく、テーブルの上に料理が並べられいく。

「腕によりをかけて作ったんよ！ささっ、食べてぇな」

笑顔ではやてが言う。

「（料理か…永らく口にしていなかったな…）」

ハクトはそう思い、料理を口にする。

「どうや…？口に合わんかった？」

心配そうに聞いてくるはやて。するとハクトは

「うまい…」

そう一言だけ呟いた。はやては心配そうな表情からパァと笑顔になり

「よかったわぁ…口に合うようで…」

「……」

ハクトは何も言わずモクモクと料理を食べ続けた。そして料理全て食べ終わり、はやてが食器を洗っていると

「私も手伝おう」

「ええよ、ハク兄は休んでてな」

「む…だが」

ハクトが何か言おうとするとはやてが

「大丈夫や、これぐらいの事はいつも一人でやってた事やし…」

はやてがそう言うとハクトが目を瞑りながら

「確かに今までは一人でやっていたかもしれないが…今は一人ではないだろう？それに…兄の心遣いは素直に受けておくべきだぞ？」

ハクトのその一言で驚いた表情をするはやて。だが直ぐに笑顔になり

「じゃ～手伝ってもらってええかな？」

「心得た」

ハクトがはやての横に立つ。

「ありがとうな…ハク兄…」

ハクトに聞こえない声で呟く。そしてハクトが手伝った事により、食器が早く洗い終わった。そして風呂の入る用意ができたので、はやてが居間にいるハクトのとこに来た。

「ハク兄、お風呂の準備できたよ」

「うむ…風呂か…」

するとはやてが頬を赤らめもじもじして

「あの…ハク兄…一緒にお風呂入ってほしいんやけど…」

「……」

「ダメ…？」

上目遣いでそう言うはやて。

「背中を洗う程度ならいいだろう」

その一言ではやて満面の笑みになる。

そして風呂場

「はやて…痒いとこは無いか？」

「もうちょっと右のとこや～」

今ハクトは、はやての髪を洗っているところだった。その様子は他から見れば、仲のよい兄妹そのものだった。はやての髪が洗い終わり

「次は私がハク兄の背中流してあげるわ」

「む…では頼もうか」

ハクトはそう言い背中を見せる。

「ハク兄の背中ひろいなぁ～」

必死に背中を洗うはやて。

「そうか…？」

「そうや～…っと、これでよしや」

どうやら洗い終わったらしい。

「すまないな、はやて」

「ええって、兄の背中を流すのも妹のつとめやし」

その一言にハクトはフッと笑った。

風呂から上がり、ベランダで夜風を浴びているハクト

「ハク兄ここにいたんやな」

はやてがアイスを持ってハクトの横に来た。

「ハク兄も食べる？」

「うむ・・・いただこう」

ハクトははやてからアイスとスプーンを受け取り、蓋を開けスプーンですくい、口にする。

「お風呂の後のアイスは格別やな～」

「・・・・・・」

「ハク兄、どないしたん？」

はやてが顔をのぞきこみ言う。

「私はこの世界に来たばかりだが・・・この世界に来て良かったと思っている・・・」

「えっ？」

ハクトのその言葉で頭に？を浮かべるはやて。

「私は今まででずっと戦ってきた、何時まで続くかわからない戦いを・・・、そして私の戦いはこの世界に来たことによって終わった。心半ばでこの世界に来た、だから初めは元の世界に戻りたいと思った。だが今は違う、今はこの世界に居たい心の奥で思っている・・・何故かは知らないがな・・・」

「ハク兄・・・」

「すまないな、はやて・・・この話は忘れてくれ・・・」

ハクトはそう言いスプーンを動かす。そしてアイスを食べ終え

「はやて、もうそろそろ床につきたいのだが部屋を案内してもらえないか？」

「え、う、うんこっちやで」

はやてはハクトがこれから過ごす部屋へと案内した。

「この部屋や」

「すまないな・・・」

ハクトがベットに近づくとはやてが

「ハク兄おやすみなさい」

ハクト振り向き

「ああおやすみ、はやて」

ハクトがそう言い返すとはやてが扉を閉める。

「・・・おやすみ・・・か」

そう呟き、ハクトはベットに身体を寝かす。テルミとの戦いの疲労が残っていたのか、ハクトは直ぐに眠りについた。

ハクトがこの世界に来てから数日が経った。そしてハクトは様々なことが判った。この世界は機械技術が発展しているのだと。最初、車を見てとても驚いていた。その様子を見てはやては腹を押さえて笑っていた。そして自分の内にある筈のスサノオユニットだ。どうやらスサノオユニットは全く起動していない。恐らくあのゲートを通ってこの世界に来たとき、スサノオユニットが何かしらの影響を受けて、停止した。と結論付けていた。その何かしら、というのは全く判らないが・・・。そして今、ハクトとはやては街に出てショッピングをしている。因みにハクトの服装は、白いパーカーに黒いジーンズだ。ハクトがこの世界に来た次の日にはやてに買ってもらった。店の人は驚いていた、ここまで白い服が似合う人はいない、と。

「ハク兄、行きたいとこがあるんやけどええかな？」

「私は構わないぞ」

「よっしゃ！ほな行くで」
はやての案内でとある店についた。
「翠・・・屋？」
「そや～ほな入るで～」
ハクトとはやては店に入ると
「いらっしゃいませ～」
元気な声な眼鏡をかけた女性店員がハクト達の元に来た。
「お二人様ですか？」
「ああ」
「ではこちらです」
店員に案内され空いていた席に着き、メニューを見るハクト
「ご注文が決まったら教えてくださいね」
「ああ」
「ハク兄、ここの店のシュークリーム絶品らしいで～」
「ほう・・・ではそれを頼む」

「私も～」

「かしこまりました」

店員はそう言い、奥の方へ行った。

「はやてが絶品と言うシュークリーム・・・興味があるな・・・」

「フフフ、楽しみにするがええでぇ～ま、私も楽しみやけど～」

ハクト達が会話をしていると、店員がシュークリームを持ってくる。

「どうぞ」

シュークリームがテーブルに置かれる。先にはやてが食べる。

「うまぁ～～今まで食べたシュークリームの中で一番やわぁ～」

はやてがシュークリームを頬張りながらそう言う。

「ほう・・・では私も・・・」

シュークリームを口に運ぶハクト。

「・・・ほう、なかなかに美味だな」

ハクトがそう言うとはやてが笑いながら。

「おおぉ！ハク兄が私の料理以外を褒めた！珍しいな～」

「あなた達って兄妹なの？」
店員の質問にハクトがいち早く答えた。
「そうだ」
「けど全く似てないような・・・」
「む・・・」
「私とハク兄は義理の兄妹なんよ」
「へぇ～そうなんだぁ～、私も妹がいるんだけど・・・そろそろ店の手伝いに来るはずよ、あ、自己紹介が忘れてたわ、私、高町美由希っていうの、よろしくね」
「八神はやていいます、よろしゅうな」
「・・・八神ハクトだ」
その瞬間、店のドアが開き、茶髪の少女が入ってきた。
「あ、来た来た♪、ちょっとこっち来て～」
美由希がその少女を手招きする。
「なぁに？お姉ちゃん」
「この子が私の妹よ」

「あの～何歳や？」

はやてが少女に質問をする。

「８才だよ」

「わぁ～同い年やな～、私八神はやていうんや、よろしゅう～」

「はやてちゃんだね、うん覚えた！、え～と、そっちの人は？」

少女はハクトの方を向く。

「・・・私は八神ハクト、はやての兄だ、よろしく頼む・・・」

「はやてちゃんのお兄さん？かっこいい人だね～」

「そやろ～私の自慢のお兄ちゃんやからな～」

「あ、私自己紹介してなかった」

そしてこの瞬間が

「私は高町なのはっていいます！よろしくね！」

白き侍と将来の管理局の白い悪魔の出会いだった。

第二話（後書き）

白い悪魔との邂逅ですwこの小説のハクメンなんか優しすぎる気が・・・。

文才力がさらに欲しいです。ところで疑問ですが・・・スサノオユニットと、

斬魔・鳴神ってロストギアに入りますかね?。感想お待ちしています。近いうちに、もう一つの小説も更新いたします。

第三話（前書き）

どうも、白き修羅です。暑いですね～暑いと色々大変です。クーラー効いてる部屋での執筆・・・いいですねぇ～今回少し短いですが・・・三話どうぞ。

第三話

第三話

翠屋にて。

「ハクトさんって不思議な人ですね」

「？」

美由希がハクトにそう言う。だがハクトは、何が不思議なのかわからない表情をする。

「なんていうのかな…どこか怖そうだけど、どこか優しそうな雰囲気がして」

美由紀の言葉に「クスッ」とはやては笑う。

「ハク兄は凄く優しい人やで～怖い夢見た時一緒に寝てくれたし、私が寝るまでずっと頭撫でてくれたし」

「へぇ～」と感心するように声を上げる美由希。そしてなのはは、誰にも聞こえないくらいの小さい声で

「いいなぁ・・・」

そう呟く。だがハクトはその呟きをしっかりと聞いていた。そして

ハクトはなのはの頭に手を置く。

「ふぇ？」

ハクトは何も言わず、なのはの頭を撫でる。

「ふにゃ～・・・」

夢心地のような表情をする。ハクトは「フッ」と笑う。

「・・・！？ハクトさん何を！？」

なのはは、ハッと我に返ってハクトから若干離れる。

「してほしかったのだろ？」

「ふぇ？」

「美由希、なのはをもっと甘えさせてやれ・・・なのははまだまだ甘え盛りだ、妹を甘えさせるのも姉の務めだぞ？」

ハクトの言葉に少し驚いた表情をする美由希だが

「フフッそうね・・・」

と言う。そしてなのははハクトに近づき

「あの・・・ハクトさん・・・また頭撫でてくれませんか？」

「ふむ・・・いいだろう」

再びハクトは、なのはの頭を撫でる。

「にゃ～～・・・」

またなのはは夢心地な表情になる。ハクトの撫では不思議な力がこもっているかもしれない・・・。すると、ハクト達の近くに、一人の女性が近づいて来た。

「あら、なのはが知らない人に懐いているわね」

「あ、お母さん」

なのはが言う。ハクトは撫でるのをやめ、その女性の方を向く。

「なのはの母親？」

「ええ、私は高町桃子、え～とあなたは？」

「私は八神ハクトという。そしてこっちが私の妹の」

「八神はやてです」

少し不機嫌そうに言うはやて。ハクトは何故はやてが不機嫌なのかわからなかった。

「はやてちゃんとハクト君ね、よろしくね」

ニコッと笑う桃子。

「（二児の母親にしては随分と若い気がするな・・・）」

ハクトはここの中で呟く。

「そういえば、恭也は？」

桃子が美由希に問う。

「一時間したら来るって」

「恭也？」

「今ここには居ないけど、私の息子よ」

「（む、三児の母親だったか・・・三児の母親でこの見た目・・・人間わからないものだな・・・）」

つくづく思うハクトであった。

「う～ん・・・」

桃子が急に、ハクトの顔をまじまじと見る。

「・・・何だ？私の顔に何か付いているか？」

すると桃子が

「ねえハクト君、ここで働かない？」

「む？」

桃子の突然の申し受けに困惑の表情をするハクト。

「ハクト君、なかなかにカッコいいから女性客が集まると思うんだけど・・・給料はこれ位出すわよ」

桃子はメモを取り出し、幾つかの数字を書いてハクトに渡す。

「む・・・こんなに出しても構わないのか？」

「どれどれ～」

はやてはハクトの持つメモを覗き見る。そこには7桁の数字が並んでおり、はやても驚く。

「うは！こんなにもらえるんか！？・・・ハク兄働いたらええやん」

「・・・はやてがそう言うなら・・・やっても構わない」

「本当！？」

「ああ」

ハクトの言葉に桃子は喜ぶ。

「よかったわ、男性店員全く居なかったからこれで解決ね！」

「働くといっても具体的に何をすればいい？」

ハクトは桃子に問いかける。

「ウェイターの仕事をやってもらいたいわ」

「・・・ああ」

「じゃ早速明日から来て頂戴」

「承知した。さてはやてそろそろ帰るぞ」

「えっ？もうそんな時間か・・・じゃ美由希、桃子さん、なのはちゃんまたな～」

ハクトははやての車椅子を押す。

「ハクトさん！また明日！」

なのはが元気な声で言う。

「ああ、また明日な」

ハクトはなのはにそう言い、ハクトとはやては翠屋を後にした。

そして帰り道。

「しかし、勢いでああは言ったが・・・私に接客業など勤まるだろうか・・・」

ハクトの呟きに、はやてが答える。

「大丈夫やて、ハク兄なら絶対できるって、私が保証するで！」

「・・・ありがとうはやて。はやてがそう言うとできそうな気がするな」

「えへへ・・・」

こうして見ると、はやてとハクトは本当に仲の良い兄妹である。

「そういえばはやて、なのはを撫でている時機嫌が悪そうだったが・・・何故だ？」

ハクトの問いに、はやてが少し言葉を詰まらせるが

「だって・・・ハク兄は私のお兄ちゃんや・・・自分のお兄ちゃんが他の子にあんな事してたら・・・」

ハクトは直ぐに気づいた、はやてはヤキモチをやいているのだと。

「・・・はやて、今日は一緒に寝るか？」

「えっ？ええの！？」

「ああ」

「やった！ハク兄、早く帰ろ！今日はハク兄の好きなシチューやで！」

「フッ、はやてのシチューは絶品だからな、楽しみだ」

ハクトは微笑み、車椅子を押していく。

彼ははやてが悲しむ事、苦しむ事をとても嫌う。ハクトは初めてはやてと会ったあの日から、はやての心の支えになると決めた。そして我がたった一人の大切な妹を、再び笑う事を思い出させてくれたはやてを、我が全てを懸けて守ることを心に誓った。そして・・・彼は一年後、再び剣を握る事になる。

「我は空(くう)、我は鋼(こう)、我は刃(じん)！我は一振りの剣にて、一人の『少女』を守り・・・『悪』を滅する！！我が名はハクメン・・・推して参る！！」

彼は再び戦いに身を投じる。それは・・・一人の少女、八神はやてを守る為、その刃を持って悪を滅する為、数々の困難との邂逅が始まる・・・

第三話（後書き）

どうでしたか！？ハクトまさかの翠屋で働くことにwジンの顔って普通にイケメンですよね？まあそんな事はどうでもいいですが、次回、ハクト、ハクメンに復活します！！お楽しみに！！感想ドシドシまってます！（◇）ゼェア！！

第四話（前書き）

ども、白き修羅です。遂にハクメン復活です！

第四話

第四話

ハクトがはやての兄になり、一年が経った。ハクトが翠屋の仕事を始めた途端、桃子の狙い通り、女性客の割合が激増した。ハクトは接客を臨機応変に対応し、全く文句の付けどこがない評判ウェイターとなった。ハクト曰わく「接客業など向いてないと思ったが…意外に楽しいかもしれない…」と口にしていた。

ここ最近変な声が頭の中に聞こえると、はやてにハクトが言ったのだが、はやても変な声が聞こえたらしい。2人とも気にはしていたが、いつしか声が聞こえなくなったので、大したことではないですました。

そして病院にて、今はやての足の診察中である。

「あまり進展がないわね・・・」

幸恵が呟く。はやての足は一向に回復する兆しを見せない。

「副作用が出ないようだったら、少しだけ薬の量増やす？」

幸恵の問いに

「・・・お願いしますわ」

はやてはそう答える。

「……」

ハクトは腕を組み、無言で立ち尽くしていた。

はやての診察が終わり、病院を後にしたハクトとはやて。

「私の足、治らへんのかな…」

はやては、弱気な声で言う。

「大丈夫だ…絶対に治る」

ハクトは車椅子を押すのをやめ、はやての頭を撫でる。

「…ありがとな、ハク兄。ネガティブにいくのやめよ！」

はやては元気な声で言う。

ーードン！

「「！？」」

突然地面が揺れる。

「地震かな？」

「…！？はやて！？」

バゴォ！

突然はやての目の前に、木のような物が突き出てきた。ハクトははやてを抱きかかえる。

「ハ、ハク兄！？」

そしてハクトはその場を直ぐに離れた。

「此処なら安全だろう…」

ハクトはそう言い、後ろを振り向く。木が街の至る所に生えている。異形な空間が其処にあった。

「何なんやあれ…」

はやてが思わず声を漏らす。

「…はやて、少し待っていてくれ」

ハクトは、はやてをその場にあったベンチに下ろす。

「ハク兄！どこに行くんや！？」

「はやての車椅子を持って来る。彼処に有るはずだからな」

「ダメや！あそこは絶対に危険や！」

声を荒げるはやて。ハクトは、はやてと同じ目線にしゃがむ。

「大丈夫だはやて。絶対に戻って来る。私を信じろ」

ハクトの真っ直ぐな瞳にはやては黙って見る。少しの沈黙があったが

「…わかった、絶対、絶対戻ってきてな！」

「ああ」

ハクトは微笑み言う。そして街へ向かった。

見渡す限り、木、木、木である。まさにその場は異界と化していた。

「一体何が原因だ・・・？」

ハクトは周りを見渡しながら呟く。

ドゴォ！

「グゥ！？」

突然、ハクトは何かが腹に当たる感覚がした。そこにあったのは腕の太さ程の木の枝だった。そしてハクトはその木に体を飛ばされる。

「チッ！」

ハクトは何とか着地をする。だが腹部のダメージはかなりのものだったのか、片膝をついている。

「このままではまずいか…」

木は再びハクトに襲いかかる。ハクトはそれをかわす。

ドゴ！！

「がぁ！？」

かわした後に、地面から木の枝が生え、ハクトを背後を襲い、ハクトは吹き飛ばされ、地面に落ちる。

「ぐ…うぅ！」

地面に倒れ、苦しげな声を上げるハクト。ハクトはふと思ふ。もしこの木の異形がこのまま広がっていけばどうなるか？間違いなくこの先にいるはやてに危害が及ぶ。そんな事は絶対にあってはならない。ハクトはゆっくりと起き上がる。そして瞼を閉じ

「我が内に眠りし、三輝神、スサノオユニットよ！一人の少女を・・・はやてを守るために・・・私に力を貸せ！！」

その刹那、ハクトは白き輝きに包まれる。

「スサノオユニットよ、我が呼び声に応じたか・・・今一度、私は剣（つるぎ）を握る！おおおおおおお！！！！！」

ハクトは吼える。そして輝きは一層強まる。・・・そして輝きが収まると、そこに居たのは、白を基調とした鎧、両肩、両足など、いたるとこのに赤い眼のようなものがついており、背中には身の丈程の刀を携え、そして何より目を引くのは何も描かれていない、真っ白な仮面を被っており、その素顔を窺い知ることはできない。そう・・・その姿こそ、彼の本当の姿。

「ふむ・・・やはりあの時と同じく、二割程度か・・・だが問題ではない」

彼は刀を抜刀し、正眼に構える。そして

「我は空(くう)、我は鋼(こう)、我は刃(じん)！我は一振りの剣にて・・・」

彼は『罪』を刈り取ることは止めた。そしてこれからは一つの事を心に誓う。

「・・・一人の『少女』を守り・・・『悪』を滅する！！我が名はハクメン・・・推して参る！！」

六英雄が一人、白き英雄『ハクメン』がここに復活した。

「うっ・・・」

一人の少女、高町なのはが、街に広がる木々の中枢部に居た。なのはの格好は、白い学校の制服に似た服を纏っており、杖のようなものを持っている。ダメージでも負ったのか、苦しげな表情をしてい

る。

「なのは！大丈夫！？」

なのはの足元で、イタチに似た生き物が、なのはに心配そうに声をかける。

「う、うん、大丈夫だよユーノ君・・・」

「けど・・・」

すると、なのはの体より大きな木の枝が、なのはに襲い掛かる。なのははそれを避けようと思ったが、足が動かない。そして木の枝は、なのはに直撃しようとしていた。

「うっ！」

「なのは！！」

ーーーズバァ！！

一迅の白き風が、枝を切り裂く。

「えっ？」

なのはは、何が起こったかわからないようだ。自分に当たるはずだった木の枝が、自分の足元に落ちている。そして目の前には、白い鎧に身を包めている男。ハクメンが立っている。

「（何故高町なのはが此処に居る・・・？それに足元に居る、イタ

チ、ただのイタチではないな・・・）」

「あ、あなたは一体？」

ユーノがハクメンにそう尋ねるが

「イタチよ「フェレットです！」む、ではフェレットよ・・・あれは滅してもよいのか？」

ハクトはそう言い、刀でおおい茂る木の葉の中に青く輝く光を指す。彼はあれがこの異形の原因だと感じた。

「え？えっと・・・いいですよ？」

何故、疑問系なのか聞きたいが、今はそれどころじゃない。彼は刀を横に構える。

「ゆくぞ・・・！」

彼は駆ける。木の枝がハクメンを襲うが

「鬼蹴・・・！」

姿勢を低くしてそれをかわし、高速で踏み込み

「闇魔！！」

踏み込み後に身体をバネとした鋭いアッパーを放つ。すると木の枝は易々と粉々になる。

「すごい！！」

ユーノが声を上げる。そしてハクメンは青く輝く光りに近づき

「ぜぃあ！！」

ーーー斬！！

鋭い斬撃を放つ。すると、青い輝きが収まり、巨大化した木々が徐々に小さくなり、最後には普通の大きさの木が其処にあった。

「・・・存外もろかったな」

「「・・・・・・」」

なのはは、唖然とした表情をする。ハクメンは刀を納刀し、無言でその場を立ち去ろうとする。

「待ってください！」

不意に、なのはに呼び止められたので、ハクトは歩みを止める。

「助けていただいてありがとうございました！えっと・・・名前を教えてもらっていいでしょうか？」

「そんなことより、いいのか白き少女よ？警察とやらが此方に向かっているぞ？」

なのはは、耳を澄ますと、救急車やらパトカーのサイレン音が聞き取れた。

「にゃ！ど、どうしよう！」
「フッ、さらばだ・・・」
彼は一瞬でその場を離れ去った。
「誰だったんだろう・・・」
「そんなことよりなのは！ジュエルシード回収して早くここから離れよう！」
「あっ！そうだったの！！」
あたふたしているなのは。ユーノは「ハァ・・・」とため息をつく。

「ハク兄・・・遅いな・・・それに木がなくなってしまったし・・・」
はやてがベンチに座り、ハクトが来るのをを待つ。すると
「はやて」
ハクトの声が聞こえたので、そちらを向く。
「ハク兄！！」

ハクトが車椅子を押し、はやての前に来る。

「すまないはやて、少し遅くなった」

そしてはやてを抱きかかえ、車椅子に座らせようとするが、はやてはぎゅっとハクトを掴んで離さない。

「はやて？」

「・・・心配したんや」

その声は涙声だった。

「ハク兄、戻ってくるの遅いし、何かあったんかと思ったんよ・・・ハク兄が居なくなったら・・・また私一人になるやんか・・・」

「・・・そうか、すまなかった、心配かけたな・・・」

そう言い、はやてを車椅子に座らせる。

「ハク兄、私の前から居なくならないって、約束してくれへんか？」

はやてがそう言うが、ハクトは既に答えは決まっていた。

「ああ、約束しようはやて。私ははやての前から居なくならない。ずっと一緒だ・・・」

ハクトははやての頭を撫でながら言う。はやては笑顔になり。

「ありがと、ハク兄」

「フッ・・・さて早く帰ろう」

「うん！」

ハクトは車椅子を押す。

彼は力を取り戻した。それははやてのに降りかかる脅威を、全て打ち払うため、彼は戦う。そして、影で暗躍する者が、ハクトに牙をかけようとしていた・・・。

第四話（後書き）

どうでしたか？正直、ハクメンの戦闘がこれでいいか心配です。やはりハクメンは二割の方がしっくり来るので、二割のままです。あと、ハクトははやてにメッチャ弱いですw

感想お待ちしております！！

第五話（前書き）

ども、白き修羅です。今回はあの者達との邂逅です。どうぞ

第五話

第五話

「この男か・・・」

一人の老人、時空管理局提督。ギル・グレアムは、とある部屋でモニターを眺めていた。そのモニターに映っていたのは、雪のように白い髪に、血のように赤い瞳をした男。八神ハクトだ。彼の隣に二人の女性が立っていた。だがその二人は、猫のような耳と尻尾が生えている。

「お父様、この男は？」

髪の短い女性、ギル・グレアムの使い魔、リーゼロッテが問いかける。

「この男は八神ハクト。一年前に、闇の書の娘の元で暮らしている男だ」

「父様どうなさいますか？」

次は髪の長い女性、同じく彼の使い魔、リーゼアリアが問いかける。

「…悪い芽は早めに取り除いた方がいいな」

八神はやてにはずっと一人で居てもらわなければならない。忌まわしきロストロギア『闇の書』を封印するために。ずっと一人で、誰

とも関わりなく暮らしてもらわなければ、十年以上かけてきた計画が水の泡になってしまう。今回しかチャンスはないのだ。あの闇の書ごと八神はやてを封印するチャンスは。

「わかりました、あの男を排除してまいります」

リーゼロッテとリーゼアリアは姿を消した。ギル・グレアムは椅子にもたれかかる。

「我が計画の為に…」

ギル・グレアムはそう呟く。その時の彼の表情は、どこか哀しげだというのは誰も知らない…

翠屋にて、ハクトは現在仕事中である。

「ハクトく～ん」

「どうしました？」

ハクトは桃子に敬語で言う。ハクトは客達の目の前では、上司である桃子に敬語で話している。

「今日はもう上がってもいいわよ」

「わかりました」

彼は帰る支度をした。

「あれ？ハクトさん帰っちゃうの？」

なのはがハクトにそう聞く。

「ああ…それではな」

「うん、また明日ね」

ニコッと笑うなのは。そしてハクトは翠屋を出た。

家への帰り道、彼は幾つかの事を考えていた。まず先日眼を覚ましたスサノオユニットだ。どうやら自分の意志であの姿（ハクメン）になれるようだ。あの姿のままだったら生活が出来ない…、彼としては都合がいい。そしてあの木の異形について、あれを倒した後、元の大きさに戻った。そしてその傍らに青い宝石のような物が落ちているのを確認できた。恐らく、あの宝石が木を異形した。と彼は考えた。ここ最近、この街に不穏な気配を感じるようになった。あの宝石はまだ至る所にあるのだろう。

「あの宝石もそうだが…気になるのは、高町なのはだな…」

そう、なのはの事も気になる。何故あの場になのはが居たのだろう？そしてあの妙な姿に、あの杖、あの杖はこの世界の、事象兵器の部類にあたる物だろう…。

「…あの杖、トリニティの物に似ていた気がするが…」

そんなことはどうでもいい。と呟くハクト。彼女が彼処に居たのは、あの宝石を回収しにきたのだろう。そして自分はたまたま其処に居合わせた。あの宝石は一体何か？後で聞いてみるのもいいだろう。と彼は考えた。

そしてハクトは自宅に到着した。

「今戻ったぞ」

そう言い、ハクトは居間に入る。

「お帰り、ハク兄～ちょうどええとこころに来たわ」

「？」

「醤油切れてもうて、仕事帰りに疲れてるところ申し訳へんけど・・・買ってきくれへん？」

「ああ、承知した・・・」

ハクトはそう言い、家を出た。

近くのスーパーで醤油を買ったハクト。休憩がてらに公園のベンチで腰を下ろして、ビンの牛乳を飲んでいる。

「ふむ・・・この世界の牛乳は中々に美味だな・・・む？」

ハクトは周りの異変に気づき、立ち上がる。今は3時だ。この時間帯に公園に人が一人も居ないなどという事は有得ない。ましてやこの活気のある海鳴市ではもっと有得ない。

「人の気配が感じられない・・・それに・・・結界か？」

するとハクトの眼前に、仮面を付けた二人の男が突如として姿を現した。

「（転移魔法か！？）」

「八神ハクトだな？」

右側に居る、仮面の男がハクトに問う。

「・・・いかにも」

ギュィン！

「！？」

ハクトの体に、光りの輪のような物、バインドがハクトを拘束する。

「グッ！なんだ此れは！？」

ハクトはそれをとこうとしたが

「無駄だ、それは破壊できない・・・」

左側の男がハクトに言い聞かせるように言う。

「貴様等・・・一体何が目的だ！？」

ハクトは声を荒げて言う。

「目的？、それは・・・お前を殺すことだ」

その言葉にハクトは少し眉が動く。

「殺す？私をか？」

「ああ」

「・・・ククク」

ハクトは静かに笑む。

「何がおかしい？」

その問いにハクトは答える。

「自らの技量を知らぬ者が、身の程を知れ！！スサノオユニット、解放！！」

その瞬間ハクトの姿が変わり、白き侍、ハクメンの姿になった。

「はぁあ！！」

バキィン！！

「「なっ！？」」

ハクトは、バインドを腕力だけで引きちぎる。仮面の男は驚愕の声を上げる。そしてハクメンは刀を抜き、構える。

「殺すと言ったのだ・・・其れなりの覚悟は出来ているのだろうな・・・」

ゾクッ！！

仮面の男は殺気を感じた。

・・・ヤバイ・・・コイツ絶対にヤバイ・・・殺される！！

二人はそう感じた。それは『倒す』というレベルの殺気ではなく、まさに『殺す』という殺気がハクメンの体から感じ取れる。ここまで強烈な殺気を感じたのは二人にとって初めてだ。気づけば足が震えていた。

「如何した？足が震えているぞ？」

「くっ・・・」

カッ　カッ　カッ

ハクメンは右側の男に近づく。男は恐怖のあまり、身動きすら取れず、呼吸もまともに出来ない。そして

「ゼェア！！」

ズバァ！！

「あぁああ！！！！」

「ちっ・・・浅かったか・・・」

男を袈裟に切り裂いた。左側の男がすぐさまもう一人の男を抱え、ハクメンから距離をとる。すると二人の姿が変わる、二人の女性、リーゼロッテとリーゼアリアがそこに居た。今ハクメンが切ったのはリーゼアリアだったようだ。

「ほう・・・猫か・・・」

ハクメンは二人の容姿を見て呟く。

「大丈夫！？今傷を・・・」

リーゼロッテは、リーゼアリアの傷に手をあてる・・・が

「！？傷が回復しない！？」

「そ、んな・・・」

リーゼロッテはハクメンに視線を送り

「アリアに一体何をした！？」

リーゼロッテは声を荒げ問う。

「フッ・・・我が剣、斬魔・鳴神は切り裂いた部分の時を止める・・・如何なる回復術を施しても癒える事はない・・・だが浅かったな、自然治癒位は出来るだろう・・・」

彼の持つ武器、アークエネミー斬魔・鳴神(オオカミ)は、あの驚異的な回復力を有する『蒼の魔道書』を持った、ラグナ＝ザ＝ブラットエッジを切り裂いた時も傷が癒えることがなかった。

「と、時を切る・・・！？そんな・・・まるでロストロギア級の・・・」

「しかし猫か・・・ククク、私は何かと猫と縁(えにし)が有るようだな・・・」

彼はそう呟き、鳴神を構える。

「さあ・・・冥府の王が呼んでいるぞ・・・！」

ハクメンは二人に近づく。だが

「・・・気が変わった、直ぐに私の目の前から消えろ」

「えっ？」

二人は、呆気にとられた表情をする。もし彼がここで二人を殺したとしよう。そうすればはやてと共に居られない。人殺しの自分がはやての側に居て言い訳がない。彼はそう思い、二人を殺す気がなくなったのだ。

「次に私の前に姿を現してみよ、その時は・・・」

ジャキ！！

「ひっ！」

リーゼロッテの首に鳴神をあて

「二体の骸が並ぶと思え！！」

二人は慌てて姿を消した。そして彼はスサノオを解除する。

「フン・・・何者かは知らんが・・・まあいい・・・む」

彼は買った筈の醤油を探す。すると醤油ビンは足元で割れていた。

「・・・買い直さなければならんな」

彼はそう呟き、再びスーパーで醤油を買い帰宅した。その後はやてに「遅い！」と怒られたのは別の話である。

「ヒッグ・・・お父様ぁ・・・」

椅子に座るギル・グレアムに涙声で声を掛けるリーゼロッテ。

「アリアは大丈夫だよ、傷の処置はしたからね。それにすまないロッテ、私のせいで二人には怖い思いをさせた・・・」

「お父様ぁ・・・」

ギル・グレアムは思う。あの男がもしあのまま気が変わらずにいたら・・・間違いなく二人を失ってただろう。あの男をどうにかしないと、自分の計画が実行できない。彼は、泣き続けるリーゼロッテを撫でながら考えていた・・・

第五話（後書き）

第五話でした。牛乳を飲むハクト・・・なんかシュールw少しプラチナネタを出しましたwあとロッテ達が惨敗しました。ファンの皆様方申し訳ありません。次回は展開を早くします。感想お待ちしています！！

第六話（前書き）

白き修羅です、こんばんわ。今回はある者とハクトを接触させます。今後のための布石です。ハクトはジュエルシード事件に少ししか関与しません。今回は短めですが、どうぞ

第六話

第六話

「お待たせしました、翠屋特性シュークリームです」

テーブルにシュークリームを丁寧に置くハクト。

「では、ごゆっくり・・・」

一礼して、店の奥に行く。女性客は奥に歩いていくハクトをずっと見ていた。その様子を見て桃子は思う。

「（うわぁ～皆ハクト君に釘付けね～）」

「桃子、如何した？」

「いえ、何でもないわ」

「そうか・・・」と小さな声で呟くハクト。彼は女性達から熱烈な視線を送られているのは、全く知らない。というか気づいていないのだった。

翠屋の仕事が終わり、牛乳ビン片手に帰宅最中のハクト。

「・・・うむ、やはり雪〇の牛乳は美味だ・・・」

と呟く。彼は仕事帰りに雪〇の牛乳を飲むことが日課になっていた。
彼は牛乳を一本飲み終わり、二本目に手をつけようとした瞬間

「っ！？」

異様な気配が感じられた。それはあの木の異形が現れた時と同じだ。
すると背後から

ダダダダダ！！！

巨大な黒い猪が、ハクト目掛けて走って来た。

「くっ！！」

ハクトは横に飛びかわす。猪はそのまま走り抜けていった。

「あれもあの石の異形か・・・む！？」

彼は驚愕した。先程手を付けようとした二本目の牛乳ビンが、猪の足跡つきで地面に落ちて割れていた。

「・・・・・・」

パリン！

彼は飲み干した牛乳のビンを握り割る。

「化け猪めが！！スサノオユニット、解放！！」

彼はスサノオを起動し、猪の後を追いかけていった。幸いにも誰にも見られていなかった。

「・・・フッ！」

猪の突撃を軽々とかわす、金髪の両方で結い、黒いマントをはためかせている少女。

「早いけど・・・動きが直線的すぎる・・・」

フェイト・テスタロッサが呟く。余裕な様に言うが、彼女は肩で息をしている。

「けど・・・攻撃が全然通用しない・・・」

すると

ドコォ！

猪の横から、オレンジ色の髪の女性が殴りつける。

「これでどうだい！！」

フェイトの使い魔、アルフが言う。だが猪は何事もなかったように起き上がる。

「くっ！なんてタフな奴なんだい！！」

アルフは叫ぶ。

「（このままじゃ、私達が不利になる・・・どうすれば・・・！？）」

フェイトは気づいた。誰かが自分の張った結界の中に入ってきた。

「一体誰が・・・」

彼女がそう呟いた瞬間、彼女の横を白い何かが通り過ぎる。ハクメンだ。

「火蛍（ほたる）！！」

バキィ！

空中で身体を横に倒し、真上に向かっての回し蹴りを放つ。すると猪の巨体は空中に浮かび上がる。そしてハクメンは更に空中の猪に近づき

「椿祈（つばき）！！」

ズバァ！！

身体を横に捻って1回転させ、その勢いのまま鳴神を振り下ろし切り裂く。猪は勢いよく地面に激突する。そして彼は地面に着地し

「まだ終わらぬ！！ゼェアァ！！」

ズドン！！

彼は鳴神を縦一閃に切り裂く。

「「・・・・・・」」

フェイトとアルフはその様子を、口をポカンと開け見ていた。猪の巨体は姿を消し、その場には普通サイズの猪と、青い宝石が落ちていた。彼はその宝石を拾う。

「・・・これがやはり元凶だったか」

彼は呟く。

「あ、あの！」

フェイトに声を掛けられ、其方を向くハクメン。

「それを・・・渡してもらえませんか？」

その言葉に一瞬迷うハクメンだが

「・・・良いだろう」

フェイトに向かって宝石を投げる。フェイトはそれを危なげなくキャッチする。ふと考えたらハクメンは、あの石を自分が持っていても仕方がない、なら欲している者に渡すのもいいだろう。と彼は考えた。

「黒き少女よ・・・何故(なにゆえ)集めているか聞かぬが・・・其れは危険な

物だぞ・・・」

「・・・はい、ジュエルシードは危険な物だとわかっています・・・けど、集めなきゃいけないから・・・」

「ジュエルシード？その石の名称か？」

「は、はい・・・」

フェイトはそう呟く。

「其れは貴公等が回収しているのだな、なら早めにこの街からその石を回収してくれ。其れはこの街に有って良い物じゃない・・・」

「わ、わかりました・・・」

「任せた・・・でわ、さらばだ」

彼は踵を回し、フェイトに背を向ける。

「あ、あの！名前、教えてください！」

彼は立ち止まり

「我が名は、ハクメン・・・」

「ハクメン・・・さん」

彼は再び歩み始めた。フェイトの隣にアルフが並ぶ。

「・・・何者だろうね、アイツ」

「わからない・・・けど」

フェイトは一息置き

「きっといい人だよ」

フェイトはそう言う。アルフは「そうかな～仮面つけて怪しいよ～」と言っていた。フェイトの頬が赤くなっていたのは誰も気づかなかった。

帰宅路のハクトは、牛乳を再び買って、満足そうな顔をしていた。はやてが「ハク兄牛乳好きやな～」と口にしていた。

第六話（後書き）

フェイトと接触させました・・・やらかした。ハクト牛乳の怒り。食べ物の恨みは恐ろしい、といったところです。火蛍と椿祈の連続技。ハクメンコンボで基本ですねwところで何故牛乳かといいますと、助けて！ココノエ博士！でココノエがカルシュウムもっと取れと、言っていたので、牛乳を飲ませましたw感想お待ちしています！！

第七話（前書き）

今晩です。白き修羅です。今回は飛んで、あいつらが登場します。
ＰＳ事件はごり押しで終了させましたが・・・ではどうぞ

第七話

第七話

ハクトがフェイトと出会ってから数日後。海鳴市に不穏な気配は全て消えた。フェイトかなのはがジュエルシードを全て回収したのだろう。これでこの街の脅威はなくなった。ハクトはそう思い、胸をなで下ろした。

「むう・・・何を買えばいいか・・・」

海鳴市のとある宝石店で一人、一際目立つ白い髪の男。八神ハクトがショーケースの中を腕組みしながら見ている。彼は今日の翠屋の仕事を早めに終わらせた。理由は明日、はやての誕生日だからだ。はやては女性だから、誕生日プレゼントはペンダントを買おうと、この宝石店にやって来た。だがいざ買おうとしたが、何を買えばいいか全く判らない。彼此考えて二時間が経った。そんなハクトを見かねたのか、一人の店員がハクトに近づく。

「何かお探しでしょうか？」

「うむ、プレゼントにペンダントを買おうと思っているのだが・・・

正直何が良いのかわからなくてな・・・」

「彼女さんにプレゼントですか？」

店員のその言葉に少し困った表情になるハクト。

「違う、彼女にではない・・・妹にだ」

「妹さんですか、そうですね・・・少々お待ちください」

店員がそう言うと、ショーケースの中から一つのペンダントを取り出す。それはハートの形で、無色透明でとても美しい宝石が埋め込まれていた。

「ほう、金剛石か」

「お客様なかなか古風なお方ですね」

それは褒め言葉か？と思うハクト。

「しかし何故金剛石なのだ？」

「知りませんか？ダイアモンドには、ある石言葉があるのですよ」

「石言葉？」

「はい、ダイアモンドの石言葉は・・・」

ー永遠の絆なんですよ

永遠の絆・・・ハクトはその言葉を聞き、決断した。

「それを買おう・・・」

「かしこまりました、〇〇万円になります」

ハクトは財布を見る。「よし足りる」と呟き、金を出す。

「ありがとうございます」

そのペンダントを、綺麗に包装紙に包んでもらい、店を出る。

「・・・良い買い物をしたな」

そう呟き、家に直行した。

「戻ったぞ」

「ハク兄お帰り」

ハクトは居間のソファーに座る。

「今日もお疲れや。あ、ハク兄牛乳飲む？」

「いただこう」

はやては、ソファーに座っているハクトに牛乳を渡す。

「にしてもハク兄牛乳ごっつ好きやな、やっぱ白やからか？」

「・・・白ければいいものではないぞ」

ハクトの言葉に、はやては苦笑する。

「今日の夜は何だ？」

「今日は鍋やで！」

「うむ・・・？昨日もではなかったか？」

「はて？何の事やろ？」

はやては口笛を吹きながら知らん顔をし、キッチンへと向かった。

そしていつも通り、晩御飯を食べ、はやてとハクトは一緒に風呂に入った。そして居間でハクトは珍しく、はやてと格闘ゲームを一緒にやっている。はやては青い服に、稲妻を纏っている剣を持つキャラを使用し、ハクトは赤い服に、炎を使うキャラを使用している。

「ガンフ〇イム！！」

ドーン！

「ちょっ！ハク兄！そこでガンフ〇イム！？」

「ドラ〇ン・イン〇トォォル！！」

ボコーン！

「あー！！ハ、ハク兄の圧勝やないか…」

はやてはグテーとうな垂れ、コントローラーを手放す。

「ハク兄ホント初心者なんか？」

「ああ・・・このゲームをやったのは初めてだ」

「それなのになんでそんな強いんや・・・？」

「・・・センスか？」

「ほぉ～」と言い、半目になりハクトを睨むはやて。

「けど負けへんで！さっきまでのキャラは使い手じゃあらへんからな！次から本気出すで！」

「ククク・・・良いだろう・・・」

はやては「よっしゃーやったるで！」と大きな声で言い、コントローラーを再度握る。

そして一時間後

「ナパァー○・デス！！」

チュドーン

「・・・な、なんやて～～！！」

あっけなく全敗してしまったはやて。

「真っ白に燃え尽きたわ・・・ははは・・・」

はやては空笑いする。

「ふむ・・・このゲームは中々に面白いな・・・しかし・・・この人物は誰かに似ているような・・・」

ハクトは手を顎にそえ考える。

「ハク兄そのキャラ使うの禁止や！！」

ビシィとはやては、ハクトに指を指す。

「はやて・・・もう１１時だぞ？」

「あ、もうそんな時間なんや・・・ほな寝よか」

「はやて、少し待ってくれ」

はやてが自室に行こうとするが、ハクトはそれを止める。

「何や？ハク兄」

「少し早いが・・・」

ハクトはポケットから、綺麗な包装紙に包まれた物を出す。

「はやて、誕生日プレゼントだ」

そう言い、はやてに手渡す。はやては驚きの色を隠せない。

「は、ハク兄・・・覚えとったんか？」

「勿論だ。妹の誕生日を忘れる兄が居るか？」

「ハク兄・・・なあハク兄、開けてもええ？」

「ああ」

はやては、包装紙を取っていく。そして綺麗なペンダントが姿を現す。はやてはそのペンダントを手に取る。

「綺麗・・・これって本物のダイアモンド？」

「うむ・・・」

「け、けどこれ高かったんじゃ・・・」

「フッ・・・」

ハクトははやてに近づき、頭を優しく撫でる。

「お前の為だ、値など如何でもいい。私ははやてに喜んで欲しくて買ってきたのだ。はやてが値なんて気にすることはない・・・」

「ハク兄・・・」

「ところで・・・気に入ってくれたか？」

ハクトの問いに、はやては即答する。

「うん！ずっと、ずっと大切にする！！」

「喜んでもらえるようで良かった・・・」

「あの、ハク兄？」

「？何だ？」

「これ付けてくれへん？」

「ああ」

ハクトははやての首に、ペンダントのチェーンを回す。

「ど、どうかな？」

「・・・似合っているぞ、はやて」

「ありがとハク兄。あ、ちょっとかがんでくれんか？」

「わかった」

はやての前で、ハクトはしゃがむ。

「もうちょっとコッチ来て」

「うむ・・・」

ハクトは更に近づく。そして

チュッ

はやては、ハクトの頬にキスをした。

「！？」

頬を赤く染め、ハクトの頬から離れるはやて。

「えへへ・・・ありがとうのキスや」

はやては小悪魔的な笑みを見せる。

「む・・・」

突然の事で少しハクトは動揺したが、直ぐに気を取り直し

「そういえば、はやて知っているか？その宝石には石言葉と呼ばれるものがあるのだぞ」

「石言葉？教えて教えて！」

はやては興味心身になって問う。

「その宝石の石言葉は・・・永遠の絆だ」

その言葉に驚くはやて。

「・・・永遠の絆か～私達にピッタリやん」

満面の笑みになって言う。

「フッ、確かにな・・・」

ハクトも僅かだが笑みを浮かべる。

はやてはあの後自分の寝室へ来た。ハクトからプレゼントされたペンダントを手に取り見つめる。初めて自分の家族から貰ったプレゼント。そう考えると、はやては頬を赤らめ自然に笑みがこぼれる。

「ありがとな・・・ハク兄、大好きや・・・」

そう呟く。その瞬間、光がはやての視界に入った。

「ん？なんや眩しいな…」

其方の方を向くと、そこにははやてが何時も大事にしている、鎖に縛られている本が異様な紫色の光を放っていた。

「な、なんや…」

思わず声を漏らす。そして部屋がグラッと揺れ動く。その本は光を放ちながら、静かに浮かぶ。美しい金の装飾が施されている表表紙が、まるで生き物のように脈打つ。

（封印解除します）

無機質な音声が、はやての頭の中に響く。本ははやての下に降りてきた。はやてはそれから離れようと後退る。

（Ａｎｆａｎｇ）

その瞬間、はやての胸の辺りから光輝く玉のような物が現れた。はやては驚きのあまり声をだせない。そして玉は本の中に吸い込まれるように入っていった。すると本は激しい光を放つ。

「ひゃあっ！」

思わずはやては目を瞑る。徐々に光りが収まっていくのがわかる。はやては恐る恐る目を開けるはやて。

そこにはいつの間にか、紫色に光る魔法陣の前に四人の男女が跪いていた。はやてはポカーンと口をあけていた。

「闇の書の起動を確認しました・・・」

先頭で跪いているピンク色のポニーテールの女性がそう言い

「我ら『闇の書』の収集を行い、主を守る守護騎士にてございます」

その女性の後ろに居る、金髪の女性が続けてそう言う。

「夜天の主の元に集いし雲…」

続けて、犬か、狼の耳を持つ浅黒い肌をした大柄な男性が静かに言う。そして最後に、赤い髪をおさげにした、幼い少女が

「『ヴォルケンリッター』何なりと命令を…」

そう言う。はやては突然の事の連続で、遂に

「きゅう・・・」

バタンと倒れた。

5分前

「・・・ありがとう、ハク兄・・・か」

ハクトはソファーに深く腰を掛け、誰もいない居間で呟く。

「私も・・・変わったものだな・・・」

彼がこの世界に来てちょうど一年が経とうとしていた。彼にとってはやては掛替えのない人物だ。自分に笑う事を思い出させてくれた、そして自分を実の兄として接してくれる。

「初めてか・・・誰か一人をここまで護ろうと考えるなんてな・・・これからもずっと・・・はやてを護っていこう・・・」

と瞼を閉じて呟いた。するとはやての部屋から突然、異質な気配が感じられた。

「はやての部屋か!?」

ハクトははやての部屋に向かう。

はやての部屋の前に来たハクト。何やらはやての声ではない者の声が聞こえた。ハクトは迷わず扉を開ける。

「はやて!!」

扉を開けると四人の人物、ヴォルケンリッターがはやての前に居る事が、ハクトは確認できた。そんなことは如何でもいいとハクトは心の中で言い聞かせ、はやての方を見る。

「貴様何者だ!!」

ピンク色の髪の女性が立ち上がり、警戒心を露にする。だがハクトはそれを無視し、はやてに近づく。

「なっ！？貴様！！」

ハクトは、はやてを抱きかかえ

「はやて！！しっかりしろ！！はやて！！」

はやての体を揺する。だが一向に目を覚まさない。ピンク髪の女性は更に声を荒げ

「質問に答えろ！！貴様は何者だ！！」

「むう・・・この時間だと幸恵は起きているか・・・だが行くしかないか！！」

女性の言葉は、如何やらハクトの耳に入っていないようだ。ハクトは、はやてを抱きかかえたまま立ち上がるが、ピンク髪の女性がいつの間にか剣を手に持ち、ハクトの眼前に向ける。

「貴様・・・私をおちょくっているのか？」

「退け・・・」

「何？」

ハクトは殺気を込めて

「退けと言っているのが判らぬか！！邪魔だ！！」

「ぐっ！！（な、なんだこの異様な殺気は！？こいつ只者ではない！？）」

ハクトの殺気に、思わずたじろぐ。ハクトはその隙に、部屋を出た。

「！？追うぞ！！」

ハクトの後をヴォルケンリッター達が追う。他の者が見たらその光景は珍妙だった事は・・・どうでもいいことだが・・・。

第七話（後書き）

・・・ごり押しでしたね・・・ようやくヴォルケンズ登場！そしてハクトのスルースキル発動ｗハクトとヴォルケンズ達のからみにご期待を！！まだ感想を書いたことのない人も、感想待っています！！

第八話（前書き）

こんばんは、白き修羅です。紅き修羅の方が全然進んでないので、少ししたらそちらを進めたいと思います。

第八話

第八話

はやてを病院に連れてきた後…

「こんな夜中に急に来たんだもの、本当に心配したわ。ハクト君だってすごく心配そうな顔してたのよ」

「心配かけてほんとすんません・・・」

はやては幸恵に頭をペコペコと下げて言う。ハクトはその様子を、腕を組み、壁に寄りかかりながら見ていた。

「・・・む？」

ハクトは視線を感じた。それはあの四人、ヴォルケンリッターからだった。彼女達は数人の男の看護士にぐるりと囲まれている。ハクトが少し睨むと、ピンク髪の女性は警戒した表情で見、金髪の女性はビクッ！としてオロオロしだし、赤髪の少女は一瞬だけ視線をずらし、獣耳の男はじっとハクトを視線に捕らえている。

「（・・・私を警戒しているのか？）」

「はやてちゃん・・・あの人達は誰なの？」

幸恵はヴォルケンリッターに指を指して、はやてに問いかける。

「え～と・・・」

「ハクト君はあの人達の事知ってるの？」

「知らん」

「即答！？」

幸恵は唖然とした表情をする。

「こんな寒いのに何か変な格好してるし、言ってる事は訳分かんないし・・・ハクト君も知らないようだし・・・」

腕を組み悩む幸恵。

「（どないしよ・・・本の中から出てきた、なんて言える訳ないし・・・）」

考えるはやて。すると突然はやての頭の中に、女性の声が聞こえてきた。

（御命令を頂ければ、お力になれますが・・・）

と聞こえてきて、びっくりするはやて。キョロキョロ周りを見渡すが、誰が話しかけているか判らない。声からするにピンク色の髪の女性のようだ。

（これは思念通話です。心で御命令を念じて頂ければ、御命令が私に伝わります）

そうはやては言われるが、突然の事の連続だったので、未だに頭が混乱している。だがはやては何とか気を取り直し

（え～と、ほんなら命令ー、と言うかお願いや、ちょっと、私に話合わせてな？）

ピンク髪の女性にそう念じた。

（はい・・・）

はやては幸恵の方を向き

「え～と・・・石田先生、実はあの人達、私らの親戚で・・・」

「親戚！？」

驚いた表情をする幸恵。ハクトは僅かだが表情が曇る。

「実はこの人たちわざわざ私のの誕生日を祝いに、海外からやってきてくれた親戚なんです。それでサプライズに私をビックリさせようとしてくれて、わざわざ仮装までしてくれて・・・。でも私それを見てびっくりして気絶しちゃったんです。な皆」

はやてはヴォルケンリッターの方を向きそう言った。

「そ、その通りです・・・」

ピンク髪の女性がそう言うが、幸恵はまだ疑いのまなざしを向けている。

「・・・本当？ハクト君だって知らないって言ってたわよ？」

急に話を振られて多少焦るハクト。はやては、「話を合わせて」と何時ぞやのような表情をする。ハクトはため息を吐き

「（仕方ない・・・一芝居打つか）

ヴォルケンリッターに近づき、手を顎に沿え見る。

「・・・む？言われてみれば、なんだお前等だったか。・・・幸恵安心しろ、この者達は確かにはやての親戚だ・・・仮装しているから気づかなかったがな・・・」

ハクトの言葉に看護師達の疑いの目が緩くなる。

「ハクト君が言うなら・・」

幸恵はそう呟く。はやては引きつった笑みを浮かべて誤魔化している。だがハクトはヴォルケンリッターを睨み続けていた。

そしてはやて達は逃げるように帰宅した。今はやての部屋に皆が居る。

「そっかぁ・・・この子が闇の書っていうもんなんやね？」

「はい」

隣で片膝をついているヴォルケンリッター達の説明を聞くと、闇の書と呼ばれる魔導書を手にする。

「物心ついた時には棚に在ったんよ。綺麗な本やから大事にはしてたんやけど・・・」

と呟くはやて。ハクトは壁に寄りかかりながら思った。

「（闇の書・・・この世界の魔導書か・・・蒼の魔導書（アレ）に比べて危険性は少なそうだな・・・）」

ハクトはそう思い、はやての手元にある闇の書に視線を向ける。

「そや皆の名前を教えてくれへん？」

はやてがそう言うと、ピンク髪の女性から

「剣の騎士、シグナム」

赤髪の少女が

「鉄槌の騎士、ヴィータ」

金髪の女性が

「湖の騎士、シャマル」

獣耳の男性が

「盾の守護獣、ザフィーラ」

それぞれそう言う。

「シグナムに、ヴィータ、シャマルにザフィーラやね。うんいい名前や」

はやては笑顔で言う。

「ところで主・・・そこの白髪の男は一体何者でしょうか？とても常人とは思えない殺気を放っておりましたが・・・主の従者ですか？」

ピンク髪の女性がはやてに問う。はやては怒った表情になり

「ハク兄は従者あらへん！私のお兄ちゃんや！！」

はやてがそう怒鳴ると、シグナム達は顔を青ざめ、ハクトの方を向き

「主の兄上とは知らず数々の無礼申し訳ありません！！主を護る使命がある故、命は差し出せませんが、どのような罰でもこの私が！！」

シグナムはとても心底申し訳ないとなさそうにそう言う。ハクトはシグナムに近づき、そしてシグナムと同じ目線にしゃがみ、シグナムに手を伸ばす。

「ハク兄！」

「ッ！！」

頬を殴られると思ったのだろう、シグナムは唇をキュッと噛む。だがシグナムのその考えは見事に裏切った。

ポンッ

「えっ？」

ハクトはシグナムの肩に、優しく手を置く。シグナムは呆気にとられた。

「顔を上げよ、烈火の将シグナム。貴公は守護騎士として当然の事をしたまでだ。私も貴公の立場なら同じ事をしていただろう・・・だから気に病む必要はない」

ハクトはシグナムにそう言う。だがシグナムは

「で、ですがそれでは私の気がすみません！主の兄上に剣を向けるなど・・・許されることでは有りません！」

ハクトはその言葉に

「・・・良い、私は許す。それとも私を困らせたいのか？」

「う・・・わ、わかりました」

渋々了承するシグナム。するとはやてが何かをゴソゴソ探していた。

「あ！あった、あった」

はやてはメジャーを取り出し、シグナム達の前に車椅子で移動し

「わかったことが一つある。闇の書の主として、皆の衣食住の面倒をきっちりと面倒見なあかんということや。幸い住むとこはあるし、料理は得意や。明日みんなの服買うてくるから、サイズ測らせてな？」

目を丸くしてぽかーんとするシグナム達。ハクトはそんなシグナム達を見て苦笑しながら

「つまり・・・お前等は今日から、家族。ということだな」

はやての方を向きそう言う。

「そや！」

「そうか・・・家族が増えるのは喜ばしい事だな・・・」

その二人のやり取りを見て

「（・・・この二人はとても仲が良いのだな・・・）」

シグナムはそう感じた。彼女達は初めてなのだ『家族』と呼ばれるのが。自然と心が温かくなっていくのがわかる。それは彼女だけではない。ヴィータ達も同じ気持ちになっていたのだ。ハクトは、そんなシグナム達の様子を見逃さなかった。

「（これから・・・賑やかになりそうだな・・・）」

ハクトは心の中でそう呟いた。

第八話（後書き）

ふう・・・あ、ため息ついてすいません！。ハクトは昔と違ってかなり性格が丸くなっています。牛乳の影響ですかねwいやいや、はやての影響ですね。次回にもご期待を。感想バンバン来てください！！待ってます！！

第九話（前書き）

更新しました。私は批判メールなんかに負けません！！では第九話どうぞ！！

第九話

第九話

世界が闇に包まれている…人は死に、大地は汚れてゆく。災悪の元凶だろう黒き異形が、汚れた大地の上に立っている。そして、その異形の眼前に六人の者が居た。そして一際目立つ、一人の男。その男は何も描かれていない、まっ白い面を付けている。その男が刀を抜くと、他の者達が武器を構える。そして……

「ガァァァァァァ！！！！！」

ズバァァ！！！

「はっ！」

はやてはバッとを起き上がる。

「…今の夢？…なんや変な夢やったなぁ…」

そう言い、時計を見る。

「…まだ四時やないか…もう一眠りしよ…」

もう一度寝転がるはやて。果たして…彼女が観たのは夢だったのだろうか…。

ヴォルケンリッターが現れた翌日のこと・・・

「みんなの服かわなあかんな～」

と突然言うはやて。昨日の晩、はやてはしっかりと騎士達のサイズを計っていた。

「確かにな・・・何時までもその格好で居る訳にはいかないだろう」

そう言い、シグナム達を見るハクト。シグナム達はあの妙な格好であるため、下手に外に出歩けないのである。

「という事で！今から買いに行くで！！」

「・・・では行くとしよう」

そうしてデパートに赴いたはやてとハクト。

シグナム達のイメージで服を選ぶはやては楽しそうな様子だ。それになかなかセンスがいい様だ。

「これも似合うな～あ！これもええな～」

「・・・・・・」

ハクトは黙って、はやての選んでいる服を見ている。すると彼方此方から視線が集まってくる。それもその筈。此処は女性用の下着売り場だ。女性用の下着売り場に、男の（しかも美形）ハクトが居ると、何かと注目を浴びる。

「（む？視線が感じられる気がするが・・・気のせいだろう・・・）」

だがハクトは全くそれに気づいていない様子だ。

そして買い物が終わり、帰宅したはやて達。

「ただいま～」

「戻ったぞ・・・」

そう言い、二人はリビングに入る。はやては真っ先に、あることに気づいた。ソファーの近くに、青い毛並みをした大きな犬？が居るのに気付いた。はやては目をキラキラさせて

「うわあ～犬や～大きいなあ～可愛いなあ～この子どうしたん？」

「ザフィーラです、主」

犬・・・いやザフィーラが急に喋ったので、はやてはびっくりする。

「ど…どないしたんや、ザフィーラその格好は？」

「私は、守護獣です。狼がもう一つの姿…こちらの方が落ち着くので…」

その言葉に、ハクトが

「ほう・・・狼か・・・私の知り合いにも狼の姿になれる者が居たな・・・」

「兄殿のお知り合いに？一体どのような人なのですか？」

ザフィーラがそう問う。騎士達はハクトの事を、シグナムは「兄上」ヴィータは「兄貴」シャマルは「お兄さん」ザフィーラは「兄殿」とそれぞれ呼び慕んでいるようだ。

「藍錆の俊狼と呼ばれ、恐れられていた男だ。・・・今も変わらず主に仕えているのだろう・・・」

ハクトは懐かしむように言う。はるか昔、共に黒き獣と戦った男。今もあの牙は衰えを知らないだろう。

「済まない、一人で思い出に浸っていたようだ・・・」

ハクトの謝罪に思わず

「い、いえ、お気になさらず・・」

そう言うザフィーラ。ハクトとザフィーラがそうこうやり取りしているうちに、シグナム達女性陣がはやての買ってきた服を選び終わったようだ。

「・・・私は少し席を外そう」

シグナム達が服を着替える事を察したのか、ハクトとザフィーラは部屋を出る。

「・・・兄上に気を使わせてしまったようだな・・・」

「そうね・・・」

シグナムとシャマルがそう言う。

「大丈夫やて！ハク兄優しいからそんな事きにせへんて！」

「そうなのですか？」

シグナムがそう問い、はやては笑顔で答える。

「ハク兄はな～私が悲しんでる時とか、何時も頭撫でて慰めてくれるんやで。あと怖い夢とか見たとき、一緒に寝てくれるし、お風呂も一緒に入ってくれるで！」

はやてが笑顔で言う。だがシグナム達はある事に気づいた。

「あ、主・・・今なんと仰いましたか？」

「え？一緒にねてくｒ「その後です！」え～と、一緒にお風呂「それです！」」

シグナムが少し大きな声で

「主は兄上と一緒に入っているのですか！？」

「そうやけど・・・」

「それは、いくら兄妹とはいえ・・・ダメ・・・じゃないかな？」

シャマルがそう言う。するとはやてが

「う～ん今まで一緒に入ってきたんやけど・・・やっぱダメ？」

「「ダメです！！」」

シグナムとシャマルが同時に言う。

「まさか・・・兄貴が一緒に入ろうって言い出したのか？」

ヴィータは目を細めて言う。はやては首を横に振り

「私から言ったんや」

その言葉に一同ホッとする。

そして一段落した後。

「お兄さん、はやてちゃんは私が一緒にお風呂入りますから」

ハクトにそう提案するシャマル。

「ああ、頼む・・・正直心配だったからな・・・」

「え？」

「いや・・・男である私が、何時までも女性であるはやてと一緒に入っていていいものだろうかと思ってな・・・だが、もうそのような心配をする必要はなさだそうだな。シャマル頼むぞ」

「は、はい・・・」

騎士達は思う。ハクトは少しドコか抜けたところがあるんだな・・・と。

ハクトがシグナムに、「私は最後に入る」と言ったのだが、シグナムが「兄上より先に入るなど・・・どうぞお先に」と言ったが、ハ

クトは「女性が先だ」と言ったのでシグナムは渋々了承した。どうやらシグナムはハクトに口では勝てないようだ。結局ハクトが最後に入った。そして一同が風呂に入り終わり、はやてとハクトは晩御飯の支度を始めた。

「主、兄上私に何か手伝えることはないでしょうか？」

「別にええって、座って待ってて」

「無用な心配だ、座って居るがいい」

はやてとハクトにそう言われ、シグナムは席に座る。シグナムは先程からソワソワしており、全く落ち着いてない様子だ。

「さ、みんなできたで！」

ドンッと鍋をテーブルに置くはやて。具は何時もより倍入っている。そしてその鍋の具を、犬用の皿に盛り、床に座っているザフィーラの前に置く。ザフィーラ狼の姿をしている方がいいらしい。

「ではいただこうか・・・」

「ほな、いただきます！！」

ハクトとはやては、手を合わせて言う。シグナム達も見よう見真似で手を合わせ

「「「いただきます・・・」」」

まず先に、ヴィータが鍋の具に箸を付け食べてみる。

「う、うまい・・・」

照れくさそうに言うヴィータ。箸はどんどん進んでいく。

「・・・シグナム達も早く食べよ」

「は、はい」

シグナムとシャマルが具を口に運ぶ。

「うまいな・・・」

「ホント、おいしい」

シグナム達は笑顔で言う。

「（ようやく笑顔を見せたか・・・何だ良い笑顔をするではないか・・・）」

心の中でそう呟いたハクト。ハクトは微笑みながらシグナム達の食べている様子を見た。

「おかわり・・・」

ヴィータが遠慮がちにお茶碗を出して言う。

「フッ、よいだろう」

ハクトはヴィータから皿を受け取り、ご飯を盛る。

「む？ヴィータ少し顔を近づけろ」

「？わかった」

ヴィータがハクトに顔を近づけると、ハクトはヴィータの口元についている米粒をとる。

「全く、だらしがないぞ・・・」

そう言い、米粒を口に入れるハクト。

「あ／／／」

「「「あっ」」」

はやて達は呆けた顔をする。顔を赤らめているヴィータを抜かして。

「どうした？」

「「いえ！なんでもないです！！」」

「そうか、ならいいのだが」

「ハク兄・・・自覚なさすぎや・・・」

と誰にも聞こえない声で呟くはやて。ヴィータは頬を赤らめながら箸を動かし、ザフィーラはもくもくと具を食べていた。

第九話（後書き）

なんというフラグwハクトは無自覚なところがあるんでw感想お待ちしてますよ～！！

第十話（前書き）

久しぶりにこちらを更新しました！

第十話

「はぁああ！」

ガキィ！

シグナムが木刀で、ハクトに鋭い攻撃を与える。ハクトは木刀で受け止める。

「ほう・・・中々に良い太刀筋だが・・・」

ガシィ！

「！？」

「油断はいかんな・・・！」

ドコォ！

「ぐあぁ！」

ハクトに掴まれ、更に拳打をくらい吹き飛ぶシグナム。何故彼等がこんな事をしているかというと…

シグナムが、早朝の剣の稽古をしている時

「早いなシグナム」

不意に呼び掛けられ、振り向くシグナム。

「兄上、おはようございます」

「ああ、おはよう」

互いに朝の挨拶を交わす。

「しかし、朝早くから剣の鍛錬とは・・・感心だな」

「い、いえ・・・やはり体を動かさないと気が済まないので・・・」

「そうなのか・・・」

ハクトは腕組みをする。

「・・・なら、私と鍛錬をするか？」

「兄上とですか？」

シグナムは首を傾げて聞く。

「ああ・・・それとも何か？私では不服か？」

「そんなことありません！是非お願いします！」

慌てて言うシグナム。

そして今に至るのである。

「立てるか？」

地面に倒れているシグナムに、手を伸ばすハクト。

「ありがとうございます・・・っ！」

シグナムは立ち上がった瞬間躓き、ハクトの胸に、顔をうずめる。

「！？／／／す、すいません／／／」

シグナムは顔を赤くし、ハクトから離れる。

「いや・・・私こそ済まない・・・少しやりすぎたようだ」

頭を下げ謝罪するハクト。

「そんな・・・お気になさらずに・・・あの兄上・・・」

「何だ？」

「兄上は何処かの流派を習っているのですか？」

シグナムの質問に、ハクトは

「・・・我流だ」

とだけ答る。

「そうですか・・・我流でそこまでとは・・・」

「そう言うシグナムも流石は騎士、というだけはあるな。見事な太刀筋だった」

「い、いえ・・・そんな・・・／／／」

褒められたことがなかったのか、シグナムは顔を赤くして照れる。

「さて・・・私は先に戻る。シグナムも遅くならぬうちに戻れ」

「わかりました」

ハクトはその場から立ち去った。

「・・・八神ハクト・・・か・・・胸・・・暖かかったな・・・／／／」

シグナムは再び顔を赤くした。

「兄貴！一緒にアイス食おうぜ！」

ソファーに座っているハクトに、ヴィータがアイスを持って駆け寄る。

「フフッ・・・ヴィータは本当にアイスが好きなのだな」

「うん！だってギガうまだもん！！」

「けど食べすぎはあかんで。お腹こわして、アイス食べれなくなるよ？」

「うっ・・・食べ過ぎないようにする・・・」

ヴィータはちびちびとアイスを食べる。

「・・・そうだ、ザフィーラ。貴公等は思念通話というものがあるだろう？それは私にも出来るのか？」

ハクトの問いに、狼状態のザフィーラは頷き

「兄殿にも魔力がございますので、すぐにでも覚えられると思います。しかし何故その様なことをお聞きに？」

「・・・便利だからだ」

「・・・は？」

「思念で遠くからでも会話できる・・・とても素晴らしい事ではないか。私の世界ではそのようなことは出来なかったからな・・・」

ハクトは腕組をして言う。するとシャマルが

「あの・・・お兄さん？遠くから会話するなら・・・携帯電話がありますよ？」

その言葉に、ハクトは沈黙する。

「・・・いや・・・その・・・なんだ・・・携帯電話は一々持って歩かなければなるまい？それに比べたら思念通話の方が良い」

ハクトはそう言うと、シャマル達は苦笑した。ハクトはその様子を見て頭の中で呟いた。

「（この平穏が・・・ずっと続けばいい・・・その為なら・・・私は・・・！）」

そう呟く。

彼が、生まれて初めて手にした平穏。これが崩れるのは、彼にとって望まぬこと・・・だが・・・

「・・・妹(はやて)を護る為なら・・・家族(シグナムたち)を守る為なら・・・私はどんな『悪』にでもなろう・・・それが・・・私の新たな『道』だ！！」

この平穏は不幸にも・・・崩れ去っていく・・・

第十話（後書き）

次回、Ａｓ戦闘突入です！！お楽しみに！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9026u/

魔法少女リリカルなのはA's～悪ヲ滅シ罪ヲ刈リ取ル者～

2011年10月7日18時57分発行